様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６８７０１０６

研究課題名（和文）日常への転移を促すアート体験の理解と支援

研究課題名（英文）Inspiring Creative Competency thorough Art Experience

研究代表者
縣　拓充（AGATA, Takumitsu）

千葉大学・教育学部・特任助教

研究者番号：９０７２３０５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、アートを通じた、日常や他の場面につながるような学びの理解・支援を目的に、複数の実践研究と質問紙調査を実施した。得られた主な知見は以下の通りである。1)教養教育における、アートを通して創造的な思考を獲得させるためのデザイン原則、並びに実践のあり方を構築した。合わせて、その際に特に大学生に必要となるサポートを同定した。2)小中学校と美術館が連携したプログラムの長期的な効果を明らかにした。3)想像や表現に関わるコンピテンシーを捉える尺度を開発した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to understand how to enhance creative competency thorough art experiences. The author conducted several design-based researches and questionnaire surveys. The main findings of the study was as follows: 1) Design principles of workshop programs to enhance students' creative literacy were developed and elaborated. 2) The long-term impact on 5-9 graders of field trips to art museums was revealed. 3) The scale to measure the creative competency was developed, and the construct validity of the scale was tested.

研究分野：教育心理学

キーワード：創造性　アート　ワークショップ　転移

１．研究開始当初の背景

これまで教育心理学研究や学習科学研究は，「学校での学び」に関する有用な知見を蓄積してきた一方で，学校外の環境における「インフォーマルな学び」に対してはあまり焦点を当ててこなかった。しかしながら，そこで生起する学びのユニークな特質，そして生涯学習の視点を踏まえた上での重要性から，大人，子どもを問わず，インフォーマルな学習環境の役割も注目されるようになってきた。

インフォーマルな学びの中でも，「アート」はとりわけ注目を集めているトピックの一つだと言える。例えばアーティストと連携したワークショップは，子どものコミュニケーション能力や表現力の育成を視野に入れ，学校教育の中でも広く展開されるようになってきた。また美術館は，しばしば学校とも連携しながら，ますます積極的に鑑賞教育やアウトリーチ活動を実施している。

しかし，このように「アート」や「アーティスト」に触れることを取り入れた実践が各所で行われている中にあって，そこで生起する学びを扱った教育心理学的研究はほとんど見られない。ミュージアム来館者の体験に対する実証的研究に関しても，博物館やサイエンス・ミュージアムを扱ったものに比べると，美術館を舞台にした研究は極めて少ない。

その背景には，アートに関わるプログラムは，学習目標があまり明確にされないという問題や，アートの活動や実践を評価するための方法論が確立されていないという問題が挙げられるだろう。もちろん実践レベルで見ればユニークなものは多く見られるが，そこに評価の楔を打ち込んだり，実証的な視点から効果を取り出している研究は，世界的に見ても極めて少ない。実践をより有効なものに精緻化していくためにも，「アートを通した学び」の効果を捉える方法論を構築し，学習効果を検証することは，極めて必要性の高い課題だと言える。

２．研究の目的

本研究の目的は，1)「アート」を通じた学びの効果を，「短期」かつ「領域固有の知識やスキルの獲得」といった視点ではなく，「長期」あるいは「日常への転移」という観点から実証的に捉えること，2)その視点からアートを通じた学びを評価するための方法論を構築すること，3) アートの体験を日常へとつなげるための要因を同定し，その支援のための理論的・実践的な知見を構築すること，の3点である。

これらを通じて，ミュージアムや学校における鑑賞教育やワークショップ等の活動の，証拠に基づいたかたちでの教育方法に関わる議論が可能になるとともに，インフォーマルな学びに関わる研究にも新しい視座が提供できると考えられる。

３．研究の方法

本研究課題においては，大きく分けて４つの研究を展開した。以下，「３．研究の方法」並びに「４．研究成果」に関しては，それぞれの研究ごとに記述する。

①大学の教養におけるアートプロジェクトのフィールドワーク・調査

千葉大学の通年の普遍教育（一般教養）科目として開講されており，また千葉市美術館のアウトリーチとしても位置づけられている特色ある活動，「千葉アートネットワーク・プロジェクト（WiCAN)」において，フィールドワークや様々な調査を行った。2014 年度から 2017 年度にかけ，活動の参与観察，参加学生への質問紙調査やインタビューなど，様々な方法論を駆使しながら，活動や議論の過程について追跡した。分析に際しては，学習効果を直接検証することは難しかったため，主に参加学生の主観的な体験に焦点を当てた。

②小・中学校の鑑賞教育プログラムの長期的な効果の検証

上記千葉アートネットワーク・プロジェクトの活動の一つとしても展開されていた，小・中学生が美術館を訪れる鑑賞教育プログラムについて，その体験の効果を約４年にわたり追跡調査した。2012 年のプログラム参加当時 5～6 年生だった児童らの多くが進学した中学校の協力も得ながら，複数回にわたって質問紙調査を実施した。分析対象としたのは，2 つのコホート，計 105 名である。主に美術鑑賞に対する態度に焦点を当て，同一生徒の縦断的な変遷，並びに小学校当事にプログラムに参加していない生徒との比較から，長期的な学習効果の検証を行った。

③「想像・表現のためのコンピテンシー」に関わる尺度の作成

はじめに，アートや実習教科を通して育まれうる ESD のライフ・スキルやコンピテンシーの内実について，探索的なかたちで調べた。具体的には，実技系の教科教育に関わる研究者らと議論しながら文献調査を行った上で，芸術教育に通じた研究者へのインタビューを実施した。それらを通じて指標の作成に向けた質問項目を選定し，大学生 78 名，高校生 64 名に予備調査を実施した。その結果に基づいて項目のさらなる選定を行った上で，首都圏の４つの大学，及び４つの高校において本調査となる質問紙調査を実施した。大学生 425 名，高校生 272 名の回答を分析対象とし，多変量解析を行った。

④大学生及び市民を対象としたワークショップ・プログラムの実践

①の成果などをもとにしながら，2015 年から 2017 年に，各年度 1 度ずつ，アートを中核に据えつつ，様々な場面での創造性を促す

ことを目的としたワークショップ・プログラムを実施した。プログラムはいずれも計 5 回で構成され，大学生から 70 代まで，約 20 名～30 名程度が参加した。主にオンラインの議論・対話の内容や事後の内省報告をもとに，分析を行った。

４．研究成果

①プロジェクトには多様な専門性・経験を持った学生が，それぞれに異なる目的で参加している。インタビュー等を通して明らかになったことの一つは，そのような各学生の既有知識や目的に応じて，学びの中身は大きく異なるということである。その中には，アートやデザイン，場づくり・地域づくりなど，具体的な領域知識やスキルのレベルから，創造的思考やコミュニケーションスキルなど，ジェネリック・スキルのレベルのことまで含まれる。

また活動の過程を含めて分析してみると，デザイン原則として想定した創造的思考のプロセス（図 1）のうち，拡散的にアイデアを生成することは，例年ワークショップや実践を重ねることにより促進されていった。内省報告の中でも，「アイデアの生成」（「感じる」「考える」）のフェイズについて自信を得た参加者は多くの割合を占める。他方で，アイデアを深めていくリサーチ（「深める」）や，「価値づけ」「構造化」のフェイズで躓くグループは多く，この過程の難しさやサポートの必要性が示唆された。そこで，デザイン実験の要領で，年度ごとに実践の改良・精緻化にもつなげた。

なお生成したアイデアの評価には，目標を表象し，その目標の制約からアイデアを取捨選択する必要がある。同時に，当該領域の中でどのようなことが既になされているかという領域知識や，長年の経験によって獲得されるメタ認知スキルや直感も重要な役割を果たす。それゆえに，可能性のあるアイデアを見通すプロセスをワークショップ等の中でどのように体験させられるか，あるいはそのためのスキルをどのように獲得させられるかという部分について，多くの検討の余地があると言える。

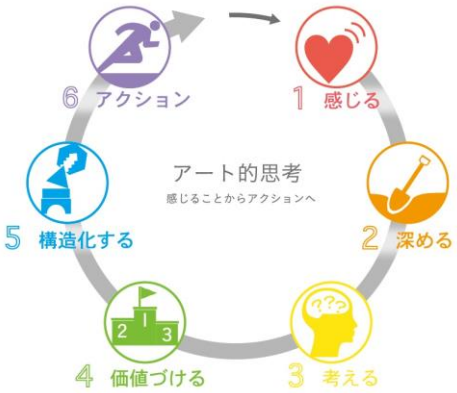

図 1　想定した創造的思考のモデル

このような実践研究自体，国際的にも稀有であるため，効果のエビデンスをより補強することで，本研究の知見は大きなインパクトをもたらすものになると考えられる。

②児童・生徒の美術に対する興味の長期的な変遷を，図 2 に示す。全般的な結果としては，美術館を訪れる鑑賞教育プログラムに参加した児童・生徒は，実践直後に劇的に美術への興味を高めるが，時間が経つにしたがってそれを低下させていく。しかしながら，プログラム未参加の児童・生徒と比較すると，いくらか高いレベルに保っているということが分かった。ただし，2 つのコホートによって傾向が異なっている上，他の場所での美術館体験など，個人の他の要因を排除できていない。それゆえ美術館来訪の長期的な効果を，本研究の知見のみから明確に主張することは難しいと言わざるを得ない。

しかしながら，学校単位での美術館賞プログラムの効果を，長期的・縦断的に追跡・検証した研究は世界的にも珍しく，海外の美術館教育の研究者からも興味を集める研究知見となった。

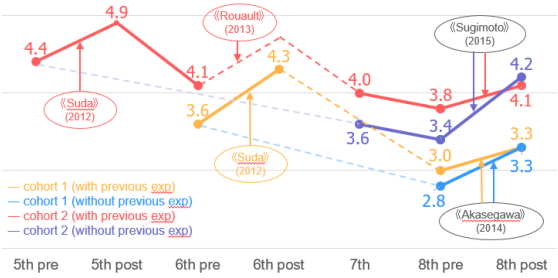

図 2　美術に対する興味の長期的な変遷

③高校生・大学生に対する質問紙調査の結果から，「感性と想像力」「自分の感覚の尊重」「難しい問題への追求心」「多様なものへの寛容性」という 4 つの因子によって構成される「持続可能な社会のための想像・表現コンピテンシー（CCS）」を作成した。また，その 4 つの因子について，価値志向性尺度「審美」，批判的思考態度尺度「探究心」「客観性」，及び，多次元共感性尺度「視点取得」との間の収束的妥当性が確認された。

本研究が一つの契機となって，教育目標として設定されながらほとんど客観的に評価・議論されることのなかった想像力や感性等に関わる指標の検討が進み，それらの育成のための実践的・理論的知見が精緻化されていくことが期待される。

④主に①の成果を踏まえつつ，「創造的思考の促進」という目的は共通しつつも，毎年度異なるテーマで実践をデザイン・実施した。参加者の躓くポイントは①とも共通するが，より多様な参加者層が参加しおり，かつ比較的短期のプログラムであるため，グループワークや協働の部分で，様々な難しさ，並びにメリットが確認されたと言える。

また内省報告を通じて，議論の過程を外から観察しても特定できない，個々の参加者の中での葛藤が多く確認された。これらは，今後のワークショップ研究にもつながっていくものだと考えられる。
その他，より詳細な活動の成果やプロセスについては，現在も分析を継続中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）
①縣 拓充・伊藤葉子・岩田美保・神野真吾、アートや体験型の活動を通じて育まれうる「持続可能な社会のための想像・表現コンピテンシー」を捉える尺度の検討、美術教育学、査読有、第 37 号、2016、pp.1-11

〔学会発表〕（計５件）
①縣　拓充、「創造活動における生成したアイデアの評価の重要性と難しさ：大学生を対象としたワークショップ型授業の検討から」、日本教育心理学会、2017
②縣　拓充、「美術と教育：心理学の視点から」（話題提供）、社会の芸術フォーラム「第 8 回フォーラム『美術と教育』」、2016
③Agata, T., The long-term impacts of art museum field trips. Art learning & creativity: Contemporary issues in formal and informal settings、2016
④縣　拓充・神野真吾、「総合大学におけるアートを通じた創造的な思考のトレーニング」日本認知科学会、2015
⑤縣　拓充・神野真吾、「小学校と連携した美術館の教育プログラムの長期的な効果」、日本教育心理学会、2015

〔図書〕（計４件）
①神野真吾・縣　拓充・山根佳奈・畑井　恵(編)、千葉アートネットワーク・プロジェクト、『WiCAN Document　2016』、2017、86
②縣　拓充・岡田猛、あいり出版「 アーティストの作品創作プロセスを見せる美術展とその効果」、中小路久美代・新藤浩伸・山本恭裕・岡田猛(編)『触発するミュージアム：文化的公共空間の新たな可能性を求めて』、2016、pp.94-113
③神野真吾・山根佳奈・縣　拓充・畑井　恵(編)、千葉アートネットワーク・プロジェクト、『WiCAN Document　2015』、2016、96
④神野真吾・山根佳奈・縣　拓充(編)、千葉アートネットワーク・プロジェクト、『WiCAN Document　2014』、2015、102

６．研究組織
(1)研究代表者
縣　拓充（AGATA, Takumitsu）
千葉大学・教育学部・特任助教
研究者番号：90723057